

正誤表

2009年11月20日訂正

横山美和 2007 「19世紀後半アメリカにおける『科学的』女子高等教育論争の展開」『F-GENS ジャーナル』9号：145-152頁。

◆p146 左段上から 23 行目

(誤) ブリンマーの**初代**学長 → (正) ブリンマーの**第 2 代**学長

◆p148 右段下から 7 行目

(誤) **286** 人 → (正) **268** 人

◆p149 左段上から 4-11 行目

(誤) 望ましいとしている。また、全体の 46 パーセントが月経時に困難を感じているが、**その多くが工場などの労働者であるとしている (同上 232)。クラークは知的活動の負荷をほかの活動と相対化するために、工場労働は「脳を女生徒ほど使わない」から女工が大学の女生徒より身体的に苦しまないという想定をしている (Clarke 1874, 133)。しかし、ジャコービの調査結果は全くクラークの想定とは異なっており、月経と休息の問題はむしろ労働との関係で深刻であることを物語ることになった。**

→ (正) 望ましいとしている (同上 59)。また、全体の 46%が月経時に困難を感じているが、**彼女は、それについて、職に就いていないことや、子ども時代や思春期の体育教育の不足などとの関連を指摘した (同上 60-61, 226)。ジャコービの調査結果は全くクラークの想定とは異なっており、月経時に休むという教育方法ではなく、若いころに体育教育を受けることや、成長してからは職に就くことなどが健康的な月経にとって良いということを示唆することとなった (2009年11月訂正)。**

◆p149 右段上から 29-30 行目

(誤) 1884 年にマサチューセッツ労働統計局が

→ (正) 1884 年**の**マサチューセッツ労働統計局**の**

◆p149 右段下から 15-14 行目

(誤) **ここでも、クラークの労働者階級に対する偏見とは対照的に、ジャコービの論と同様に女性の健康という問題はむしろ**

→ (正) **ここでは、クラークが工場の女子労働者はあまり脳を使わないため強健である (Clarke 1874, 133-134) として考慮の対象外としたこととは対照的に、女性の健康という問題は (2009年11月訂正) むしろ**

以上